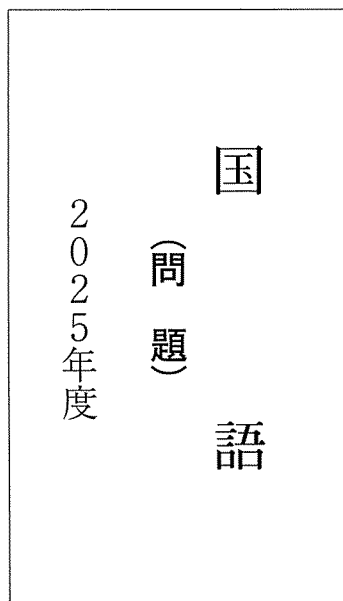




〈2025 R07190015 (国語)〉

注 意 事 項

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は2～18ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
4. マーク解答用紙記入上の注意
 - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (2) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

5. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
6. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
8. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

政治・社会思想史の研究者である森政稔はその著書『迷走する民主主義』の中で、欧米を中心に近年、民主主義についての悲観論が強まっていると述べている。普通選挙や議会制など、一般的に民主的だとされる政治制度が世界中に広まり、漠然とした観念としての民主主義に対して公然と反対を唱える人は少数派に過ぎないにもかかわらず、民主主義への失望が声高に語られているというのである。確かに、「選挙なんて行っても仕方ない」と冷笑的なことを口にする人はいくらでもいるだろうが、「だから選挙制度なんてものは無くしてしまおう」とまで主張する人はそうそういないし、「自分は反民主主義者だ」と堂々と宣言する人がいたとしても、それは民主的な社会では言論の自由が守られているから可能なのであって、その意味ではこの自称「反民主主義者」も民主主義の恩恵を大いに受けている。¹その理念や制度が広まり常態化したという意味では民主主義は勝利したはずなのに、人々の信頼を失っているという意味では敗北しつつあるという逆説がそこにはある。

森は更にこうした悲観論を、「民主主義の終焉」²論と「民主主義の過剰」³論の二つに分けて説明しているのだが、これは非常に乱暴に言えば前者が「左派」的な視点、後者が「右派」的な視点だと言える。「民主主義の終焉」論者は、民主主義が高度に発展した資本主義に従属的となっていることを問題視する。「生産者」というよりむしろ「消費者」的主体へと変質した市民が、民主的な手続きを通じて新自由主義的政策を支持することで社会的不平等と格差を広げてしまい、ますます民主主義の力を削いでしまうと主張する。

その一方で、「民主主義の過剰」論者は民主主義と資本主義を表裏一体のものと捉える。彼らによると、消費社会における欲望の増大や公共心の衰退は、民主化およびそれに伴う社会の平準化によって引き起こされたものである。人々は政府が自分たちの私的欲望を満足させようとクレーム化するが、かと言って主体的に政治を担うには公共心が欠けているため、不満を一気に解決してくれるような強い権力者を求める。そして、民主主義は結局は独裁へと傾く、と主張するのである。

この二つの立場は、資本主義の暴走と新自由主義的政策を批判する点では共通しているが、民主主義を善玉とするか悪玉に据えるかにおいて鋭く対立しているように見える。森は両者が用いる民主主義概念の相違にその原因を求めている。つまり、「終焉」論者が民主主義のことを、資本主義に代表される社会的現実に対抗する規範や理念だと考えているのに対して、「過剰」論者は民主主義のことをまさにその社会的現実そのものの、社会が向かっている傾向として見ているという。それは確かにその通りなのだが、そもそも同じ民主主義という言葉が何故こうも対立的な概念として想起されてしまうのかを、よく考えてみる必要がある。

例えばこれがヨーロッパ社会で階級対立が顕在的であった時代の議論であれば、両陣営がどの社会集団に属しているかによって民主主義に対する心理的距離を説明することはもつと容易であった。いわゆる「左派」は、恵まれない貧しい者たちを代弁する側としてこれから実現していくべき民主主義の理念を擁護するのが当然だっただろうし、「右派」は自分たちの価値観や既得権益に挑戦してくるこうした勢力を眼前の敵だと見なし、民主主義というものをより実体化した現実として憎んだことだろう。しかし、現代の欧米諸国や日本ではどうだろうか。グローバルに展開する未曾有の格差社会という現実を顧みると、こうした社会対立がとくに解消され過去の遺物になったなどという楽観的な見方はできないまでも、少なくとも民主主義に基づいた制度や文化がこれほどまでに社会に定着した時代はないのではないか。

もし仮にそうだとすると、ある意味では非常に奇妙なことに、実は「終焉」論の方がこの争いでは分が悪いように見える。民主化の進んだ社会において、民主的な手続きによって民主主義が縮小していることを「民主主義の終焉」と呼んで嘆いたり批判したりするのは随分と虫のいい話だからだ。それよりも、民主主義の進展を敵視し警戒してきた「過剰」論の方が、事実認識の面でも思想的な一貫性においてもまさっていると云わざるを得ない。それは、民主主義が良いものとされ続けてきたこれまでの一般的通念からすると、あまりにも意外かつ苦しい

結果だと言える。

「終焉」論より「過剰」論の方が説得的であるということは、裏を返せば規範や理念としての民主主義というビジョンが有効性を持たないことを意味している。「民主主義を推進しろ」「民主主義を守れ」とどんなに叫んでも、これほど民主主義が栄えた時代にその声は空しく響かざるを得ない。しかし、そもそもである。ここで敢えて「終焉」論者の意見に従って、制度的現実としての民主主義が理念としての民主主義を封殺しようとしているとしよう。では、そこで封殺されつつある民主主義の理念とは実際にはどのようなものなのか。より公正な選挙だろうか。より開かれた議論だろうか。それとも、よりいき届いた福祉だろうか。

ここに民主主義の抱える大きな問題がある。それは、民主主義の理念などと言ってもそれは所詮手続き、つまり「方法」に関する理念に過ぎないという問題である。当たり前と言えどもあまりに当たり前だが、民主主義とはまずは人民の意見を政治に反映し、その決定に人民が従うという政治体制のことであり、人民の意見は多様かつ流動的なのでその政治体制のもとでは政策決定も多様化し流動化する。だから、公正な選挙を求めることもあれば選挙の停止を求めることもでき、自由な言論を促進することもあれば言論を制限することもでき、福祉を拡充することもあれば福祉を縮小することもできるのである。しかも、その極端なスイングは、選挙結果を重視し言論の自由を許し人民の福祉が優先されるほど大きくなる。⁵「過剰」論者はこうした民主主義の持つ放埒さに警戒してきたのだ。

それにもかかわらず「終焉」論者は、こうした性質を持つ民主主義を称揚しつつ、それが自己破壊的に作用することを批判するというダブルスタンダードを採ってしまう。話は逆であり、民主主義は自己破壊を許すほど以前の良い「方法」であり、それがここまで普遍化したからこそ自己破壊も徹底的になったのだ。彼らはむしろ自分たちが支持してきた民主主義の理念を誇るべきとさえ言える。もちろん、「終焉」論者がそのような意見に従うはずはない。しかし、そうだとすれば彼らが本当に大事だと考えてきたのは民主主義そのものではないと認めるべきだろう。民主主義が（彼らが望む方向で）上手く機能するために必要な規範や理念、民主主義を支える前提こそが大事だったのである。これは民主主義という「方法」の擁護者の多くもたびたび言及していたことであり、何も目新しい主張ではない。それなのに、ここに来て民主主義に対してここまで失望感が高まっているということは、口ではカッコつけていてもやはり多くの人々は民主主義そのものをいつの間にか理想化してしまっていたのだ。

民主主義は「終焉」どころか「過剰」化しているという見解の方に説得力があり、民主主義はあくまで「方法」に過ぎないのだとすれば、要するに我々が採るべき道は民主主義という「方法」を抑制することだということになりそうなのだが、一体それはどうすれば可能なのだろうか。厄介なのはここからである。まず、

「Ⅰ」論者の末路は「Ⅱ」論者が危惧していた一種の民主独裁への道である。「終焉」論者は民主主

義の理念を守るという目的のために、資本主義に毒された「方法」を否定できる強い指導者を「方法」を通じて選ぶという、倒錯的な状況を待望することになる。しかし、民主主義という「方法」を徹底した先に現れる「方法」の否定は、二〇世紀において全体主義の悪夢として結実した。そのため、結局戦後の民主主義陣営に属する人々はその反省もあって「方法」の否定は禁じ手だと考えるに至った。権力の濫用に対する足枷としての憲法を重視する、いわゆる「立憲主義」の議論なども、まさにこうした「方法」の否定を防止することを前提にしていたと言えるだろう。それにもかかわらず、現代になってまたこうした民主独裁の可能性が世界的に浮上してきたことは見逃せない現象であり、少なくとも「リーダーシップ」「ポピュリズム」などの言葉の裏には、民主主義を通じて民主主義の抑制という禁じ手が「方法」として再検討されていることが暗示されている。

それに対して、「過剰」論の方はどうか。こちらは民主的な価値を批判する際、一般的には歴史・文化・慣習といった伝統的価値の見直しを強く要求する。しかしその際、「過剰」論者が実効的な権力を得るためには結局は従来の「右派」がそうであるように、経済的社会的有力者層と結託することとなる。そして現代においてその

有力者とは巨大な資本や新自由主義的政策担当者である以上、「過剰」論者は民主主義と資本主義は表裏一体だと考えておきながら資本に一生懸命尻尾を振ることとなる。アメリカにおける「新保守主義」と呼ばれるグループは、まさにこうした形で宗教保守としての顔と利潤追求の顔の両面を持つこととなった。「過剰」論者はむしろ体制擁護の思想として民主主義という「方法」の恩恵を受けることになってしまっているのだ。

おわかりだろうか。つまり、「終焉」論者は事実認識と思想的「一貫性」において敗北していたはずなのに、むしろ見事なまでに「民主主義の終焉」をお膳立てしている一方で、「過剰」論者はあれだけ民主主義の問題性を説き続けておきながら自身が「民主主義の過剰」を維持しようとする愚を犯しているのである。そして、「過剰」論に有利な形ではあるが二者は相補的な関係にある。「終焉」論者が民主独裁を望めば望むほど「過剰」論者は民主主義を擁護し、「過剰」論者が守る民主主義を「終焉」論者は否定しようとますます躍起になる。ただし、どちらも民主主義という「方法」を通じた形で。民主主義は「方法」に過ぎないはずなのに、我々はその「方法」から手を切ることができない。実は本当の問題は民主主義なのではない。我々が「方法」に囚われ、「方法」を考えることしかできなくなっているということこそが問題なのだ。

では一体、何故そうだと言えるのだろうか。結論から言えば、それは我々が普遍的で確固とした生きる「目的」を持ち得ないからである。生きる「目的」などと言えば、人によって様々な意見があるだろうし、それこそ「目的」などないと答える人もいるだろう。そこに宗教的なニュアンスを感じ取る人もいれば、家族・仲間・共同体などへの愛着をイメージする人もいるだろう。しかし何にせよ、その「目的」は容易に一致することはなく、各人にとっても常に不安定な、頼りないものとして映る。だからこそ人は常に迷い、苦しみ、そして相争う。そして確かな「目的」を見失った我々には、「目的」も定まらないまま「方法」を探求せざるを得ないという、極めて歪な選択肢しか残されていないのだ。

（中島啓勝『ておくれの現代社会論』による）

問一 傍線部1「その理念や制度が広まり常態化したという意味では民主主義は勝利したはずなのに、人々の信頼を失っているという意味では敗北しつつあるという逆説がそこにはある」とあるが、全体をふまえれば、どうということか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 民主主義は社会的な平等性を確立すべきものののに、民主主義的な手続きが社会的格差を拡大したところに民主主義の欠陥があると人々が気づいたこと。

ロ 民主主義は資本主義に対抗して社会の平準化を目指すものののに、資本家の横暴をも自由の名の下に認めて社会を階層化させている矛盾には解決策がないこと。

ハ 選挙制度などの民主主義のシステムは確立して広まっているのに、なんのためにそれを行っているのか人々にはわからなくなってきたおり、民主主義そのものに欠陥があるのではないかと思いついて始めていること。

ニ 恵まれない人々をサポートして人々が公平になるように機能させる民主主義の理念は、現在かなりのレベルで定着しているのが現実なのに、民主主義が切り開いたグローバル化が大変な格差社会を生み出す逆説が起きていること。

問二 傍線部2「民主主義の終焉」論」と傍線部3「民主主義の過剰」論」とあるが、「民主主義の終焉」論」の説明として最も適切なものを解答欄①に、「民主主義の過剰」論」の説明として最も適切なものを解答欄②に、次の中からそれぞれ一つ選び、マークせよ。

イ 民主主義の自由が資本主義による人々の欲望の発露を喚起し、それが社会的格差を生み出しているとする論。

ロ 民主主義による平等の理念が、消費者の資本主義的なモラルなき私的欲望を規制する規範たり得ているとする論。

ハ 民主主義は平等を旨とするので、人々の私的な欲望を肯定して発展する資本主義と相性がよく、不平等をなくするための基本となるとする論。

ニ 民主主義による平等の実現は人々の欲望を肥大化させ、他人のために何かしようという気持ちや自ら政治を担うような心意気を衰退させるとする論。

ホ 民主主義体制下においては社会が平等化されるので、人々は他人より上は望まず、公共心をないがしろにしてでも自由を重視するような傾向は弱まるとする論。

問三

傍線部4「民主主義の進展を敵視し警戒してきた「過剰」論の方が、事実認識の面でも思想的に一貫性においてもまさっていると言わざるを得ない」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜだと考えられるか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ「過剰」論は、民主主義が公共性を衰退させたことを知り尽くしており、強い権力を望んでいるから。

ロ「過剰」論は、民主主義が資本主義の行き過ぎを是正しようとすることを理解し、それに対抗し続けているから。

ハ「過剰」論は、「過剰」論を社会的に認めさせたのは民主主義であることを認識して、民主主義の力を弱めているから。

ニ「過剰」論は、自由で平等な社会はかえって資本主義の暴走を招くと批判するように、現実には格差社会が起きているから。

問四

傍線部5「「過剰」論者はこうした民主主義の持つ放埒^{ほうち}さに警戒してきたのだ」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 民意が共有できるのは民主主義の方法だけなのに、高邁な理念や思想が実現できるといふ思い込みが民主主義を暴走させると危惧してきた。

ロ 民主主義と資本主義はコインの裏表のような関係にあるので、民主主義が定着すれば資本主義も必ず進展し、極端な格差が生まれることを恐れていた。

ハ ひとたび民主主義的な手続きによって物事が決定するならば、しだいにそれが民意と異なる方向へ向かって止めることができない危険性を認識していた。

ニ 利潤を得るためにはなんでもしかねない資本主義を信奉するがゆえに、民意であればなんでも実現しかねない民主主義が危険な方向に向かうことを心配してきた。

問五

空欄 I、

II

には「終焉」か「過剰」のどちらかが入る。その組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

I I終焉 II過剰

□ I終焉 II終焉

ハ I過剰 II終焉

ニ I過剰 II過剰

問六

傍線部6「愚を犯しているのである」とはどういうことか。この文章の主旨をふまえ、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ ひとたび民主主義の理念を設定すれば、思想的に敗北したり、問題を感じる民主主義を強化したりしなければならなくなるなどおかしいことになるのは、そもそも民主主義には守るべき理念などないことを白日の下にさらしている。

□ 「終焉」論者は民主主義に対して矛盾した態度を取ることにより人々から民主主義への関心を失わせる方向へ導いている点において、「過剰」論者は民主主義を批判しながらその実民主主義を最大限に利用して資本主義を発展させている点において、思想的な混乱をきたしている。

ハ 「終焉」論者は自らが属する社会集団において格差の解消を理念としながらなしとげられず、「過剰」論者は既得権の確保を目標にしながら格差の解消を実現するなど、民主的な手続きを経た政治体制によってその属する社会集団の基盤を弱体化させる方向を決定づけた。

ニ 「終焉」論者は民主主義の理念として反資本主義的な立場を想定し、「過剰」論者は民主主義の理念として利潤の追求を想定しているようだが、現代社会ではどちらの理念を実現するためにも民主主義は邪魔になりつつあり、民主主義を形骸化させる虚無的な立場に陥っている。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

「国家」とか「国家の歴史」とか「国家の神々」とかいう観念はあまりに大きすぎて、それを日々の暮らしの中で血肉としていくことはひとりの人間にとって困難であるけれど、一方で、記憶／物語の依り代（＝小さな神々）を失った人間にとって、つまり記憶喪失のよるべない人間にとって、よるべない心と肉体を丸呑みしてくれる大きな観念ほどありがたいものありません。

（これは、別の表現で言うならば、人間が大きな観念を自身の血肉とするのではなく、大きな観念を弄ぶモノどもによって人間がその血肉とされる事態は容易に起きるのだということです）

そもそも、人間というのは、思考することにおいてタイ^a惰です。日々の生活というのは、習慣づけによる条件反射で成り立っているものでもあります。ゆえに、手取り足取り条件付けをしてくれる装置は、人間にとって、麻薬のように大変心地よく中毒しやすいものでもあります。

思うに、いったい、いまこの近代社会に生きている誰が、たとえば国家のような巨大観念の日々の動きを具体的に把握し、大きな歴史の流れを認識し、みずからの行く末を確かに知ることができるのでしょうか？ 誰がそれを意識しつつ暮らしている？

ほぼ誰もわかつてはいない、ほとんど誰も意識などしていない、それでも日常は進んでゆく、過去と現在と未来に対して盲目の状態のまま、自分が盲目であることにも気付かずに、日常は進んでゆく、ほとんどの人間は大きな観念を捕まえて使いこなすよりも先に、観念に捕まって使いこなされてゆく、喰われてゆく。

とても恐ろしい。

この恐ろしさを越えて、生きてゆく「命」であるために、つながってゆく「命」であるために、何をなすべきか。それをずっと考えてきました。

たとえば、自分の身の丈で、暮らしの中で、日常の流れの中で、記憶をつなぎ、自分の言葉で今を語り、「命」の行方を眺めやること。

そのための「場」をみずからの日常の中によりみがえらせること。

大きな神（＝物語）から放逐された小さな神々（＝声）を、われわれのもとに、いまふたたび呼び寄せること。切実に思うのはこういうこと、だけど、そう簡単なことではない。

その昔、虐げられたモノたち、踏みつけられたモノたちが（それは人間とは限らない。ケモノも鳥も魚も虫も）、苦難を乗り越えて、小さきカミになって、まつろわぬ記憶をカミの物語として語りだしたことを私は思い起こします。

その昔、「神道集」の神々の物語やら、説経の物語やら、祭文やらを運んだ旅する芸能者たちがいて、その足と声と語りで織り上げられたこの世の絵図（＝世界観）があり、語りつがれた「命」の記憶があったことを私は思い起こします。

さてさて、先回りして言っておきましょう。

小さき神々は、旅する「声／語り」が物語を語り出す「場」に降りて来て、いまここで語られている物語を自分自身の物語に書き換えてゆく、物語を乗っ取ってゆく。

たとえば、説経「さんせう太夫」のような物語が、「山椒太夫」「三庄太夫」「三莊太夫」「山榊太夫」とさまざま

まな漢字を当てられたりしながら、それぞれの土地で、それぞれの風土から生え出たかのようにして、それぞれの小さき神々の物語に再構成されてゆく、乗っ取られてゆく、というようなことが、とてもありふれたこととして長い年月の間、繰り広げられてきました。

それは、民草が主となって繰り広げられてきた、血も肉も声も通う「歴史する」風景である、といってもよいのではないか。

この風景は、保莉実が『ラディカル・オーラル・ヒストリー』で語ったオーストラリアのグリーンジ・カントリの先住民の歴史実践の風景にもつながってゆきます。

キャプテン・クック、あいつがやってきた。彼はこのカントリにやってきて白人をあちこちにおいていった。我々はけつしてそんなことはしない。それはよくないことだ。……なあ、キャプテン・クックは悪いことをした。奴はアボリジニの人々を撃ち殺し、女を盗んだ。我々はけつしてそんなことはしない。そんなことをするのは白人だけだ。……あいつらはここにやってきて間違ったことをした。だが我々はイングリランドに出かけていったりはしなかった。

（グリーンジの長老のひとり、ジミー・マンガリヤ談）

彼らはさまざまなバージョンのキャプテン・クックによる侵略と虐殺の歴史を語ります。キャプテン・クックがグリーンジにやってきたという「事実」はないけれども、日本各地に相互に矛盾する内容の「さんせう太夫」があるように、彼らの語る「歴史」も語る者次第で相互に矛盾もしているけれども、それはすべて、ジミー・マンガリヤが語るように、白人による侵略の不道徳性を語り伝えるという一点で共通しているといえます。

それは、西洋近代の歴史学の中には収まりようのない「民の歴史実践」。西洋近代の「歴史」叙述を普遍とするならば、「歴史」ではありえない「歴史」です。命に対して、どのような不道徳が、どんな者たちによってなされたか。ただその一点を語り伝える「歴史」です。

もうここまでできたら、

「小さな神々とは、われわれの命のことなのである」と言い切ってもいいのではないか。

と、そんなことを思っていたところに、在日朝鮮人の作家金石範ギンツボノミのエッセイの中で、そんな思いとは真逆のナチスの忠良なる官リョウアイヒマンの言葉にばったり再会したのでした。

百人の死は悲劇だが、百万人の死は統計にすぎない。

そうだ、この言葉のことをすっかり忘れていた。確かにそうでした。近代とは統計の時代、数字の時代でした。国家のために命を落とした数百万人の魂も、靖国に投げこめば分離不能かつ抽象的な一つの護国の神になるという、溶鉱炉のような凄まじい数字の時代でもありました。

アイヒマンの言葉は、同時に、文化人類学者川田順造によって記録された、人間存在を抽象化しないアフリカの人々のことを想い起こさせました。

アフリカの小さな村や家族で、その首長に彼の村や家族の成員が何人かと訊ねても、答えは返ってこないのが普通だ。だが、個別に、誰と誰がいるかという形でなら、誤りなく列挙できるのである。老婆も、壮年の男も、幼児も、ひとしなみに頭数で表わすのは、不条理でさえある。

（『聲』）

西洋近代の思考によって、「野蠻」であり「未開」であると分類された人々の、個別で具体でしかありえない「人間／命」への向き合い方、それを私は大切な「命の記憶の作法」として、しかと受け取りなおします。

そして、

統計のなかから、「命」をすくいだす。

抽象化された「命」に息を吹き込み、血と肉をよみがえらせる。

そのような「命」が生きるべき、つながるべき、きたるべき世界を思い描く。

その世界を語る言葉を紡ぎ出す。

それは、「旅する声／語り」と「小さき神々／記憶」を失って久しい近代世界に生きるわれらにとって、「文学」が必要である何よりの根拠でありましょう。

それはまた、近代の果ての「いまここ」で、私たちが、いまいちど、忘却へと追いやられた「声」を聴き、「語り」に耳を澄ます、なによりの根拠なのです。

いまいちど、声を大にして、言います。

この世の物語は、名もなき民の「声」によって、「命」の記憶をつないでゆくために、書き換えられ、乗っ取られるためにある。

(姜信子『語りと祈り』による)

問七

傍線部1「人間が大きな観念を自身の血肉とするのではなく、大きな観念を弄ぶモノどもによって人間がその血肉とされる事態は容易に起きるのだ」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 大きな観念は、一人の人間の理解が及ばない意味の拡がりをもっているので、それを明快に把握している人物が現れて周囲を啓蒙することは大切な場合もあるが、それは言葉の理解に止まることが多く、理想が実現されることはないということ。

ロ 大きな観念は、誰か一人の人間によって作り出されるものではなく、長い歴史の中で培われるもののなかで、歴史の解釈を自身の利益のために歪曲する者が登場した場合、個人はそれを正すことができず飲み込まれがちであるということ。

ハ 人間は生活実感を伴わない大きな観念に向き合うと、それに詳しい他者に頼りがちになる傾向があり、その他者が何らかの意図をもって観念を作り変えようとする際に、協力してしまうこともあるということ。
ニ 人間にとって大きな観念を自身でかみ砕いて理解するのは困難なことなので、その大きな観念を当然のように利用して物事を行う存在には追従しやすく、物事の大事な判断を委ねてしまうために、結果的には支配されることがあるということ。

ホ 人間社会は大きな観念の共有を基盤にして成立しており、その具現化として法や政治が存在するのだが、それらを司る人物たちは大きな観念を時として都合の良い形で利用するので、一般人はそれを見抜けず従うほかはないということ。

問八 二重傍線部 a (タイ情)、二重傍線部 b (官リヨウ) のカタカナを漢字で表現したとき、同じ漢字をカナ部分に用いるものを、次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。

a タイ情

イ 敗タイ ロ タイ漁 ハ 交タイ ニ タイ慢 ホ タイ称

b 官リヨウ

イ 資リヨウ ロ リヨウ刑 ハ 占リヨウ ニ リヨウ識 ホ 同リヨウ

問九 傍線部 2 「自分の身の丈で」、傍線部 3 「まつろわぬ」の意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。

A 傍線部 2 「自分の身の丈で」

イ 自身の決断に基づき

ロ 自身の宿命と受け止め

ハ 自身の分相応に

ニ 自身の好みで

ホ 自身の直感に従い

B 傍線部 3 「まつろわぬ」

イ 根拠のない

ロ 果てしない

ハ 沈黙しない

ニ あどけない

ホ 服従しない

問十 傍線部 4 「その足と声と語りで織り上げられたこの世の絵図（『世界観』）があり、語りつがれた「命」の記憶があった」とあるが、なぜ、足と声を使い、語り継ぐ必要があったのか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 物語とは、公にされている内容とは異なり、社会道徳を批判するものであったから。
ロ 物語とは、人間同士が出会う場において生み出され、伝承されるものであったから。
ハ 物語とは、一般庶民にも理解されやすいように歌唱や演舞を伴う芸能であったから。
ニ 物語とは、社会の縮図として創作された平易なもので、記憶に残りやすかったから。
ホ 物語とは、人間以外の動物や神々も登場するため、表現の自由が必要とされたから。

問十一 傍線部5「「さんせう太夫」のような物語」とあるが、近代文学の中で小説「山椒大夫」を執筆した作家名Iと、その作家の代表作IIを、次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。

I イ 樋口一葉 □ 中島敦 ハ 夏目漱石 ニ 森鷗外 ホ 芥川龍之介

II イ 舞姫 □ 山月記 ハ それから ニ たけくらべ ホ 地獄変

問十二 傍線部6「民草が主となって繰り広げられてきた、血も肉も声も通う「歴史する」風景」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

I 庶民の信仰の対象である小さな神々が中心となり、人間の権力闘争以外の自然界の営みを含む歴史を明らかにする現場の風景であるということ。

□ 虐げられた下層民が中心となり、価値観を同じくする集団の中でもう一つの歴史を密かに紡いで来た現場の風景であるということ。

ハ 民衆の中で表現能力に秀でた若年層が中心となり、聞き届けられなかった思いを盛り込んだ歴史を提唱して来た現場の風景であるということ。

ニ 政権批判を芸能に託して表す勢力が中心となり、封殺されて来た情念を明らかにする歴史を再編成する現場の風景であるということ。

ホ 市井に暮らす人々が中心となり、為政者に押し付けられたものではない自発的な自分達の歴史を語り継いで来た現場の風景であるということ。

問十三 傍線部7「老婆も、壮年の男も、幼児も、ひとしなみに頭数で表わすのは、不条理でさえある」とあるが、なぜ不条理なのか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

I 重要なのは固有の存在としての一人一人なので、それぞれの人生経験の蓄積を無視して数え上げることが個人の尊厳を無視しているから。

□ 労働や戦闘ができるかどうかということが最も重要なことなので、幼少期や老齢期を過ごす人間には関心が払われていないから。

ハ 最初に着目しているのは、その人間が神にどれくらい近い存在であるかということなので、幼児をその他の成人とは同列にできないから。

ニ 家族という共同体は個人を捉える前提になるものなので、そのことに注意を払わず個人を数量でしかとらえないのは極めて失礼だから。

ホ 大切なのは神の意志を直接受け取ることであって、第三者が介入して人員を把握するといった行動は個人の権利を阻害するものだから。

問十四 本文の内容と合致しないものを、次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 大きな物語から放逐された小さな声を私たちのもとに呼びあつめ、歴史の中で命の個性を回復する方法の一つは、かつての旅する芸能者たちが遺してくれた芸能に向き合うことである。

ロ 西洋近代の歴史学には収まりきらない、新興国における「民の歴史実践」とは、人類の歴史のみを優先せず、共生する環境に暮らす動植物の声を聞くことであり、それは命についての道徳を見直すことにつながる。

ハ 近代とは統計を重視する時代であるために、人間それぞれの個性よりも数が優先されることになり、膨大な数の死者を生み出す戦争において、失われた命に十分な想像力を働かせて向き合うことが困難になっている。

ニ キャプテン・クックの侵略と虐殺の歴史を伝える場合、それがいつどこで何人に対して行われたかというのではなく、白人による侵略の不道徳性を一貫して語ることに重要な意味がある。

ホ 統計の中から抽象化された命を救出する作業の際に、むしろ近代社会において「野蠻」や「未開」のレッテルを貼られてしまった人々の声を傾聴することに新たな可能性があり、それによって過去の歴史は書き換えられて行くのである。

ヘ 人間は「国家」や「歴史」といったかつて自らが作った大きな観念を、今日に至って理解し、使いこなすことが困難になっているが、そのことに自覚的になることで自縄自縛の事態を深刻化させている。

(三) 次の文章は、本居宣長が『源氏物語』をふまえて著した物語の一節である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

内にも故宮の御事を忘れさせ給はず、あはれにおぼし召し出でつつ、折々の御とぶらひ絶えずぞありける。源氏の君にも、「前坊の御息所のあはれにながめ給ふらんを、折々はとぶらひ物せよかし」など、のたまひ付けしかば、げに心にくくよしある人と、先々も聞き置き給ひしあたりの事なれば、かつはゆかしくおぼされて、一日、内より^②まかで給ふとて、夕つけておはしけり。程遠ければ、暮れ果ててぞおはし着きぬる。

御門のもとに御車立てさせて、御隨身入れて案内せさせ給ふほど、少しし出でて見入れ給へば、木立いと物古りて木暗く見えわたり、氣配しめやかに心にくく思ひやられ給ふに、そのことも聞き分かれぬほどの物の音、松風にひびき合ひて、絶え絶え聞こえるもあはれにまめかしく、なみなみならぬ爪音と聞きなし給ふにも、御心ときめきして、何事も世に名高く物し給へば、たがふべくもあらぬ御息所の御琴の音と、御耳留めて聞きおはします。内には、にはかなるほどの御訪ひに、人々そそやとあはてつつ、ささめき騒ぐほどに、御琴は弾きさし給ひつ。¹「中々なるほどを」と、君は口惜しうおぼす。隨身出でぬれば、御車より下り給ひて、いたう心懸想しつつ、ひきつくりうちふるまひて、歩み入り給ふ御さま、似るものなくめでたく、あてになまめかしう、にほひ満ちたるに、いとかがやかしう恥づかしくて、とみに出でくる人もなければ、²階のもとに佇みて、うちながめおはさうず。いと久しくして、中將の君といふ、出でて、「思ひ給へかけぬほどの御訪ひにて、何事もいと³かたはらいたく、かたじけなきわざになん」とて御褥^{とこ}さし出づるさまなど、いたうなれたり。「いでや、先々も参り侍りて、御ありさまもうけ給はらまほしうは思ひ給へ立ちながら、よろづ思ひ給へつつみてなむ、心ざしの⁴ほどをも、今までえ御覽せさせ侍らざりし。上も常に故宮の御事をのみ、明け暮れ忘れさせ給はず、この御ありさまの、心苦しうあはれることと、のたまひ出でつつ、姫宮のいかにうつくしう生ひ出で給ひぬらんなど、御心ざし浅からぬさま」など、大方の御とぶらひ、いと細やかにて、「かく参り初め侍りぬれば、又のどかにを」とて、その夜はすくよかにて出で給ひぬ。かくふりはへ渡らせ給ふ御心ざしを、いかがは浅くおぼしめされむ。かくて後は、折々の御消息絶えず、又御みづからもまうで給ひなどするほどに、よろづ見勝りのみせられて、あくまでゆゑあしく重りかによしある御氣配に、いとど御心のみとまりて、年ごろよそに思ひやりつつ、聞こえて過ぎぬることさへ⁵悔しくぞおぼされける。

折々はをかしきなほざりごとなど、うち出でされば^Aみ、御文にも気色ばましき事もうち交じりゆくに、あはれる御心ざしのほどは、うれしくおぼさるる物から、かううるさき御心の内添ひぬることを、いと心づきなく、疎ましくおぼされて、御返りもをさをさなきに、いよいよ御心いられて、御消息うちしきり、惟光など下りたちまゐり通ひつつ、まめやかなるさまにも、心寄せつかうまつり給ふこと、二年ばかりにもなりぬれば、女君の御心にも、さこそいへ、やうやうよろづ思ひ知られ給ひつつ、いと氣疎げにはあらず、折節のあはれば^Bかりは過ぐさず、なつかしう聞こえ通ひ給ふ。

なげの御筆づかひ、言の葉も、いひしらずなまめかしう、御手などあてに氣高く、見所ありて書き流し給へるを、まれまれ見給ふにも、ありがたくうち置きがたくおぼされつつ、はかなき木草につけても、あはれと御心とまりぬべき折を^C過ぐさず、心深きさまを見え聞こえ給へど、女君はなつかし^Xからん情も、いとどあいなくおぼされて、人づての御いらへ、はしたなからぬほどにて止みなむと、おぼし取りつる御心は、さらに揺るぐべうもあらざりけり。

(『手枕』による)

(注) 故宮…帝の弟で、御息所の夫。後出の「前坊」も同じ。

姫宮…故宮と御息所の間に生まれた一人娘。後の秋好中宮。

問十五 傍線部①～③の敬意の対象として、最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。同じものを複数回選択してもよい。

イ 帝 □ 光源氏 ハ 故宮 ニ 御息所 ホ 姫宮

問十六 傍線部1「中々なるほどを」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 思っていたよりは中途半端な腕前であることよ
□ なるほど、評判通りの腕前でかなり優れている
ハ もっと聴いていたのに、具合が悪いことだな
ニ これはこれでかえって余韻があるというものだ
ホ ここで終わるのは残念だが、仕方のないことだ

問十七 傍線部2「いとかがやかしう恥づかしくて」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 御息所の女房たちは、光源氏の優れた様子にたいそう面映ゆく気がひけて
□ 光源氏は、はじめて訪問する御息所の邸が想像以上に立派で驚いていると
ハ 御息所は、光源氏の突然の訪問を大変光栄に思いながらも、心が落ち着かず
ニ 光源氏は、御息所の住まいの様子があまりに魅力的で気後れしてしまい
ホ 御息所の女房たちは、主人である御息所が大変立派な人物なので、遠慮して

問十八 傍線部3「階」の読み方として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ ひさし □ ついち ハ らう ニ はし ホ すのこ

問十九 傍線部4「よろづ思ひ給へつつみてなむ」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 様々なお考えがおりになって
□ いろいろとご遠慮いたしまして
ハ 大体ご想像がつくでしょうけど
ニ 万事につけて慎み深い方なので
ホ 何かとお悩みのようでしたから

問二十 傍線部5「悔しくぞおぼされける」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ これまでの生き方を改め、これからは御息所一筋に生きよう、という光源氏の悔悟。
ロ これまで光源氏を軽薄な男と誤解していた自分が恥ずかしい、という御息所の反省。
ハ これまで御息所と交際しないでいたことが惜しまれる、という光源氏の悔恨。
ニ 亡き夫との日々を思いつつも、光源氏に心惹かれてしまう、という御息所の葛藤。
ホ 光源氏のことをもっと早くから詳しく知っておけばよかった、という御息所の後悔。

問二十一 傍線部A～Cの動作主体として、最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。同じものを複数回選択してもよい。

- イ 惟光 ロ 御息所 ハ 中将の君 ニ 姫宮 ホ 光源氏

問二十二 二重傍線部X「らん」と文法的に同じ「らん」を含む和歌はどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 住の江の岸による波よるさへや夢の通ひ路人めよくらん
ロ わが命あらんかぎりは忘れめやいや日ごとにはおもひますとも
ハ 吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらん
ニ よしや君むかしの玉のゆかとてもかからんのちは何にかはせん
ホ 長からん心も知らず黒髪 of 乱れて今朝はものをこそ思へ

問二十三 本文の内容についての説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 中将の君は、光源氏の訪問を予期していなかったので、たどたどしく応対した。
ロ 帝は、光源氏の将来を思い、あらゆる面で優れた御息所と交際するよう勧めた。
ハ 故宮は、自分の亡き後の妻子の生活を心配して、光源氏に後の事を託していた。
ニ 帝は、亡き弟の妻子の様子を気遣って、光源氏に見舞いに行くよう言い付けた。
ホ 惟光は、光源氏に命じられ、御息所への手紙を二年間にわたって代筆し続けた。

問二十四 本居宣長が著した作品を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 無名抄 ロ 古事記伝 ハ 雨月物語 ニ 去来抄 ホ 風姿花伝

(四)

西曆一〇〇四年、異民族契丹の遼が大軍を率いて宋の領土を侵し、澶淵という場所で宋軍と対峙した。次の文章は宋の宰相寇準がこの時に採った言動を伝えるものである。この文章を読んで、あとの問いに答えよ。ただし、設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある。

寇^{らい}萊^{らい}公^{こう}少^{わか}時^{とき}不^レ修^メ小^{せう}節^{せつ}、頗^ル愛^ス飛^ひ鷹^{やう}走^{そう}狗^{こう}。太^た夫^ふ人^{にん}性^{せい}嚴^{シク}、嘗^テ不^レ勝^ヘ怒^リ、拳^ニ秤^{しやう}鎚^{つゐ}投^レ之^ニ、中^{ちゆう}足^{そく}流^{りゅう}血^{けつ}。由^リ是^{こゝ}折^レ節^{せつ}從^フ学^ニ。及^ニ貴^き、母^{はは}已^ニ亡^し、每^ニ捫^フ其^{その}痕^{あと}輒^さ哭^く。

景德中、虜犯澶淵、天子親征。

枢密使陳堯叟・王欽若密奏宜幸金陵、以避其鋒。

是時乘輿在河上行宮、召寇準入謀其事。準將入、

聞内中人謂上曰、「群臣欲將官家何邪。何不三

速還京師」。準入見上以金陵謀問之。準曰、「群臣怯

懦無知、不異於向者婦人之言。今胡虜迫近、四方

危心、陛下唯可進尺、不可退寸。河北將士旦夕

望陛下至、氣勢百倍。今若陛下回輦數步、則四

方瓦解、虜乘其勢、金陵可得至邪」。上善其計、乃北

渡河。

(司馬光『涑水記聞』による)

(注) 寇萊公…宰相寇準のこと。 飛鷹走狗…鷹や犬を使つて狩りをする。 秤鎚…天秤はかりに用い

る金属の重し。 景德…宋の元号。 虜…蛮族。ここでは、契丹を指す。 澶淵…今の河南省濮陽県

の西にあり、黄河の北に位置する。 枢密使…軍事の最高司令官。 金陵…今の江蘇省南京市。長江

の南に位置する。 乘輿…皇帝のこと。 内中人…ここでは、皇后を始めとする後宮の女性を指す。

輦…皇帝の乗る車。

問二十五 傍線部「中足」の「中」と同じ意味で用いられている熟語を、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 中枢 ロ 中毒 ハ 中腹 ニ 中庸 ホ 中流

問二十六 傍線部2「及貴、母已亡、每捫其痕輒哭」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 高位に昇るやいなや、母は死去したため、やさしく傷を治してくれた母の慈愛を思い出すたびに泣き暮れたのである。

ロ 位人臣を極めたが、母はすでにあの世に行ってしまったため、母の形見の品を何度も触り、そのたびごとに嗚咽したのだった。

ハ 高官に昇進した時、母は今際の際にありながらも、息子の傷跡を力なくさすつては、いつもすまなかつたと涙をこぼしたのだった。

ニ 出世した時には、母はもはやこの世におらず、自分を正しい道に導いてくれた傷の跡を撫でては、いつも声をあげて泣いたのだった。

ホ 高貴な身分になっても、母が死んでしまったら何の孝行にもならぬと、古傷の跡を叩いて、そのたびに痛みを感じつつ涙を流したのだった。

問二十七 傍線部3「宜幸金陵、以避其鋒」の返り点の付け方として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 宜_下幸_ニ金陵、以_テ避_ニ其鋒_一。

ロ 宜_下幸_ニ金陵、以_テ避_ニ其鋒_一。

ハ 宜_レ幸_ニ金陵、以_レ避_ニ其鋒_一。

ニ 宜_レ幸_ニ金陵、以_レ避_ニ其鋒_一。

ホ 宜_下幸_ニ金陵、以_テ避_ニ其鋒_一。

問二十八 傍線部4「向者婦人之言」の内容として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 皇帝にいち早く今いる行宮を離れ、近くてすぐ戻れる、安楽な都の宮殿に帰りましょう、と訴えた。

ロ 皇帝に危険の迫り来る行宮を離れ、はるか南に位置し最も安全な金陵に向かいましょう、と訴えた。

ハ 皇帝に枢密使の言うことに耳を貸さず、後宮の女性たちの安全を第一に考えてください、と訴えた。

ニ 皇帝に現状を打破するために行宮から都の宮殿に戻って、冷静に策を練り直しましょう、と訴えた。

ホ 皇帝にすぐさま危険な行宮を離れ、金陵を除く安全な場所を捜しそこに移動しましょう、と訴えた。

問二十九 本文の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 寇準は、皇帝の退却によって宋軍が総崩れになれば、敵軍は勢いを得て一気に攻めに転じ、金陵に逃避しようとしても到達前に敵軍の攻撃を受けることになるでしょう、と述べた。

ロ 皇帝は、枢密使の意見に動かされ、行宮を離れて安全な場所に逃避することに傾きかけていたが、最終的には寇準の説得を聞き入れ、黄河を渡り北上し自ら前線へと赴いた。

ハ 枢密使は、王朝の存続を第一に考え、さらには後宮からの強い要請もあり、皇帝が敵前逃亡してもやむなしと判断して南への逃避を進言した。

ニ 前線にいる宋の將軍たちは皇帝の親征を待ち望み、皇帝の一挙手一投足を注視しているので、皇帝が前進という行動を採ることで、宋軍の士気を高めるべきことを、寇準は説いた。

ホ 腕白で野や山を駆け回ってばかりいた少年期の寇準が改心して勉学に勤しむようになったのは、母の厳しい叱責があればこそであった。

〔以下 余白〕